

「嫁入り坂」

新シリーズ

坂さんぽ ①

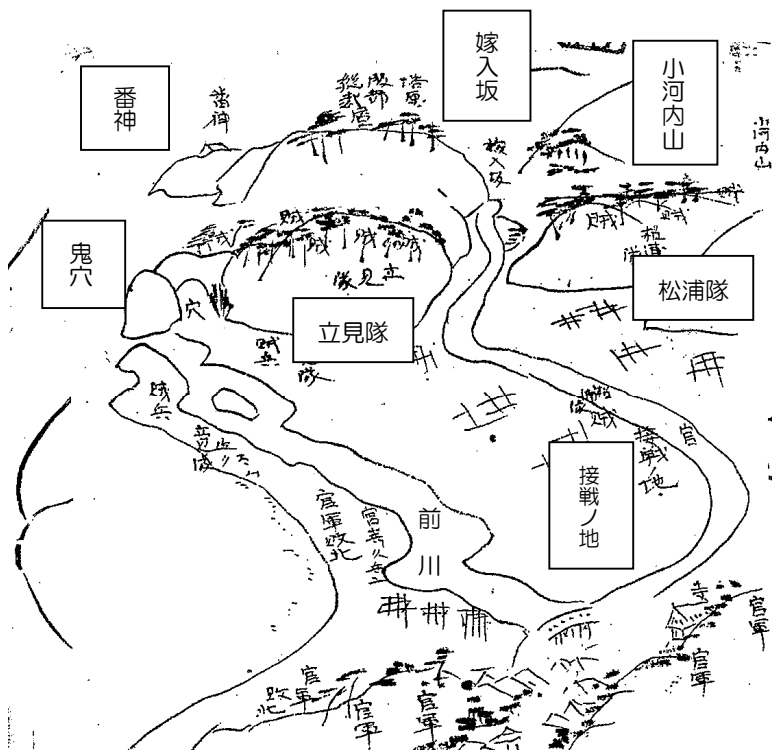
所載する郷土資料の中から
柏崎の坂を紹介します

鯨波の伝説の一つに「嫁入り坂」がある。足利時代、国府上杉家から上条上杉家へ輿入れがあり、この時切り開かれた坂と伝えられている。この坂は、御野立公園の御野立法華塔から鯨波駅裏手（海岸入口）の西方へ下る坂で、大正初期頃まで昼でも物寂しい山の道であった。

桑山太市氏の『柏崎傳説集』によれば、鯨波村の者が他の町へ嫁入りするには、海を出て行くか、山を一つ越

さなければならず大変であったため、山を切り開いて鬼穴の上に坂道を造り、嫁入り坂と云ったとある。このことからか、坂は地元の人に嫁坂と呼ばれている。また、この他に涙坂とも呼ばれている。花嫁が馬に乗って坂の上に来た時、自分の生まれた村や家を振り返り、涙を流したためという。

幕末には、嫁入り坂は鯨波戦争の地となった。慶応4年（1868年）閏4月27日、薩摩・長州藩主力の新政府軍（官軍）約2,500名と会津・桑名藩主力の旧幕府軍（東軍）500余名が鯨波の地で戦闘を繰り広げた。旧幕府軍は鯨波入口で応戦するも支えきれず退き、小河内山、嫁入り坂に防御線を敷いた。鯨波の人家は両軍の砲火で炎上し、風雨の中、激しい戦闘であったという。歴史に残る場所である嫁入り坂は、現在山林の中に細い道が残るのみである。



左図は鯨波戦争の図。上部に「嫁入り坂」と見える。この図は、関甲子次郎が『柏崎文庫』13の1巻に新聞記事「勤王実録星野藤兵衛伝に」「古稀老公今昔譚に」と一緒に添付されていたもの。新政府軍は北陸本道を進み、米山峠を越え、鯨波に向け兵を進めた。旧幕府軍である松浦隊・立見隊はこれを迎え撃った。



現在の嫁入り坂の様子

細く続く道は、途中急な坂もあり、気を付けて歩かないと道だとわからない。今回、鯨波コミュニティセンター長の石黒和夫様に現地を案内していただきました。ご協力いただきありがとうございました。

●参考にした本

- 『柏崎傳説集』 桑山太市著（388 クワ）
- 『ふるさと鯨波』 鯨波地区郷土誌編纂委員会編（069 Kハク）
- 『鯨波のこれまで』 田村愛之助編著（224 タム）
- 『鯨波雑記』 田村愛之助著（224 タム）
- 『柏崎編年史 上巻』 新沢佳大編著（224 シン）